トルコ文華嚴經の斷簡

（圖版第四圖　參照）

大正六・七年頃のことであつたであらうか、嘗て西域探檢に從事せられた吉川小一郎君から、小さな寫眞十一葉を貰つた。それが古いトルコ語の華嚴經の斷簡であることは直ちに看取したのであつたが、その後深くも研究する機會を得ないで打ち過ぎた。一昨年余の還曆祝賀の爲に知友諸君の寄せて呉れられた東洋史論叢の中に、石濱教授が「回鶻文普賢行願本殘卷」と題して、曾て Radloff がその著 Kuan-ši-im Pusar の末に附錄して掲げた名稱不明の所謂回鶻文の刻本八十四行の斷簡を、華嚴經普賢行願品の唯一殘卷に外ならぬとして、對應の漢譯本文と對照して公やけにせられたのに因んで、長く筐底に委ねたこの寫眞を取り出して、こゝにその解說と譯述とを試み、教授の頌壽記念として捧げたいと思ふ。

吉川君の撮影されたこの斷簡寫眞の原本が、その後どうなつたかは全く不明であり、どこで寫されたのであつたかも判然しないが、同氏の不確ながらの記憶によると、吐魯番で出土したのを、その地で寫されたもののやうである。この地方からは類似の諸種の佛典が多數出土してゐるのは周知のことであるから、これもその一種であらうと思はれる。

斷簡の寫眞はすべてで十一面で、毎面首行から第十三行、或は第十四行または第十五行までを存し、それ以下を